

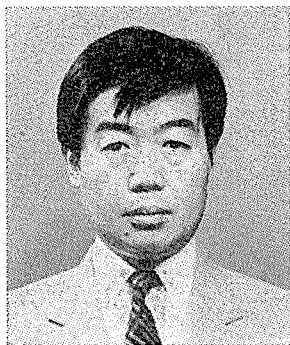
特集

PC 構造物の景観

2007年

しなやかに舞う野の はての橋

中 村 良 夫*



* Yoshio NAKAMURA
東京工業大学社会工学科教授

和辻哲郎氏が「風土」のなかで詳しく説いたように、西欧の風景は明るい牧野と森のかげりをその特色とするが、アルプスへ近づくにつれ、日本の山あいの町に似た山水の美がときに旅行者を驚かす。

西独のオーバーバイエルン地方などもその例にあげてよいところで、ある夏のさかり、オーバーアマルガウという愛くるしい山村に迷いこんでひどく感銘を受けた。

キリスト民衆劇を信心深い村人たちが演ずるとこの村の、童話めいた家並みを抜けたところにきれいな小川が流れていて、山並みにつつまれた古風な家々を遠く眺める野道の果てに、美しいコンクリート橋が架かっている。そのしなやかな橋体が岸辺に舞うのを見る旅人は、しばらくそこを動けないだろう。

この小さな橋を思い出すにつけて、気になることがある。「物より心の時代」と叫ぶ近ごろはやりの標語のことだが、物質の飽食を抜けて心のゆとりを求めるのに異論はないとしても、なおこの標語は少しばかり腑におちない。標語にありがちな舌たらずの危うさをそこに感じるからだ。

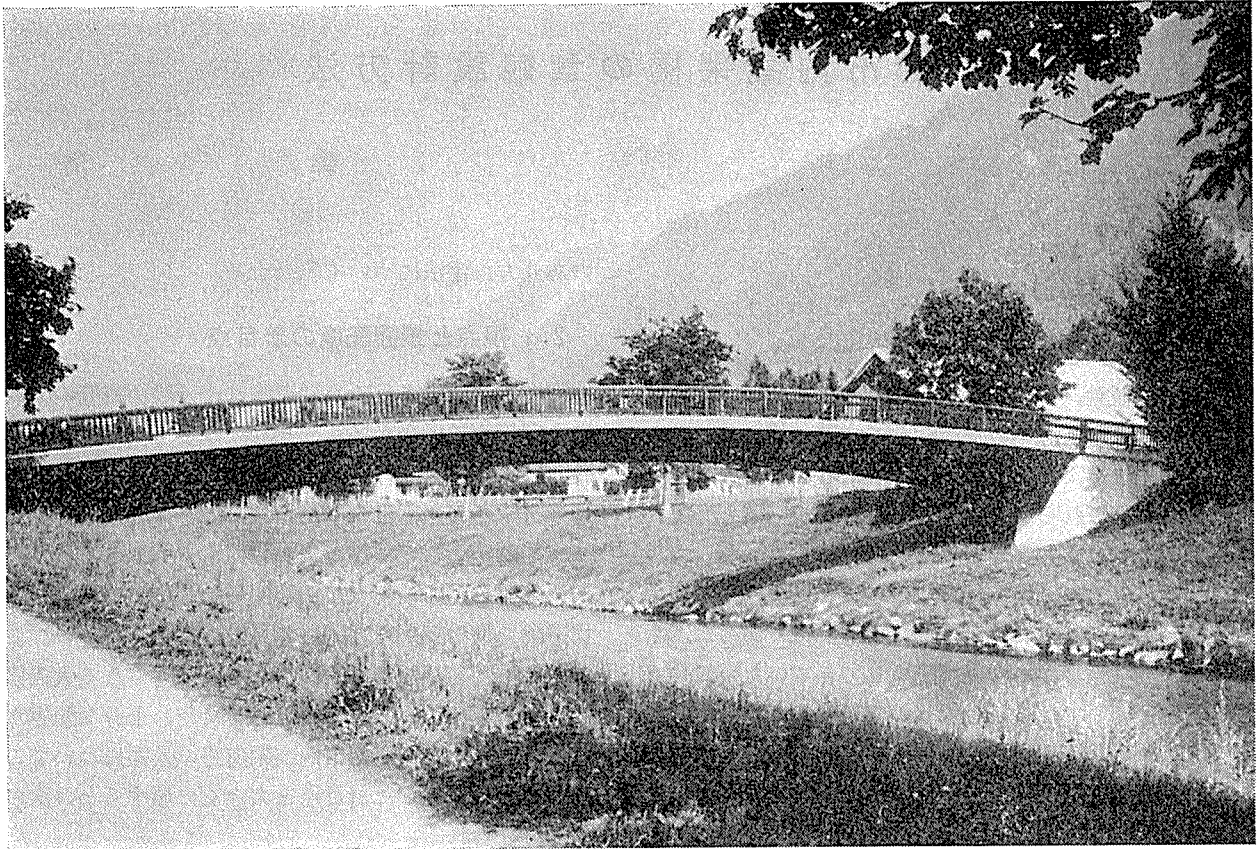
科学者や哲学者ならともかく、ふつうの生活人にとってみれば、ふるさとの橋や川をただの物体とする考えは唯物論の行きすぎである。かといって、身のまわりの物や道具を離れてつかみどころのない心の世界を詮索すれば、これまた観念論の行きすぎに思えるだろう。それなら、ふつうの生活人にとって、橋や川はどう見えるのか。それは、疑いもなく風景という物と心の融合体として現前する。景観設計とは、まさしくこの生活人の動かしがたい中庸の立場を自覚的に掬いあげる決意に始まる。

朝からこの橋の写真を眺めながら、そんな思いがまたしきりとしてくるのだが、もしそうであるなら、この事実は、心の時代なればこそ物はその姿において再び尊ばれねばならぬ、という逆説の成立を物語っていないか。

国土の風景と、そこを舞台に演じられる土木造形の重みにつき、繰り返し説かねばならぬ理由もそこにあるわけだが、橋の美的性質をあらためて問うとなれば、誤解されやすい落とし穴の隠されていることを、これまた繰り返し言わねばならぬ気がする。

「形は機能に従う」という機能主義美学の唱い文句は、過剰な装飾におちいりやすい人間をそのデカダンスの病いから救いあげ、こだわりの無い健康な形へと向かわしめるかぎり、簡潔な名言といえる。

けれども、性急な転倒のすえに、機能的なものは美しいと、それがひとたび俗流に言い崩されてしまえば、たちまち、機能は機能主義の検閲憲兵と化する一方、造形放棄の免罪符ともなって、豊かな造形を冷笑するニヒリ



ズムの葉臭をはなつようになる。

だいいち機能などという抽象的な観念に身をまかせるだけで、自ずと形が決まるものかどうか、少しでも設計の実務を手がけた人ならすぐに分かることだ。それはともかく、この性急な考え癖の裏には、事実であれば何でもそのまま人前にさらすべきだ、なぜならそれは事実だからと決めつける短慮がある。これは科学思想の軽卒な受け売りに由来する一種の無遠慮主義と言ってよい。

歴史を見れば分かることだが、公共造形にかぎらず、文学、芸術の世界においてすら、およそ公衆の目にさらされるものはすべて、作法的な雅び心とほどよい虚構の味つけを要する、というしごくあたりまえのことを認めるのにずいぶん時間がかかったのであった。

PC 橋はおそらく、機能主義美学のもっとも先鋭な実現をもたらした。けれども PC 構造の力学原理と経済性だけに下駄をあずけてしまっただけでは造形は成立しない。機能は美の大事な、しかし一つのきっかけにすぎないのだから。美しい橋は機能と形との間で斬り結ばれる激しい対論のすえに、ようやく達成されるはずの实在である。

オーバーアマルガウの橋を見ると何ごともなかったように美しい。だが、よく見れば橋台まわりのおさまりぐあい、耳桁のしなやかな緊張とやわらかな木製の高欄、そして桁の彩色、いずれも巧まれたすえの平穩無事の美である。

橋梁造形の基本について、たとえば土木学会編「美しい橋のデザイン・マニュアル」などを参照されたい。